

昭和63年 茨城県鋳工業指数の概況

1. 全国の動向

(1) 生産

昭和63年の鋳工業生産は、前年比9.5%と59年(同9.4%)以来の高い伸びを示した。

鋳工業生産は、62年年央以降、緊急経済対策の効果等が加わり、62年7～9月期以来3期連続で前期比2～3%台の急激な上昇を示した後、63年4～6月期には前期比0.8%と一服感を示したものの、その後2期連続して好調な伸びを示しており、年ベースで見ると、上記のような高い伸び率となった。

昭和63年の鋳工業生産活動の特徴としては、

- ① 4～6月期に一時伸び率が鈍化したものの、その後再び2期連続して前期比2%前後の高い伸びを示し、年間を通してみると極めて堅調な動き(四半期平均伸び率1.9%)をみせたこと。
- ② 生産を業種別にみると、伸び率に差はあるもののすべての業種が上昇を示し、おおむね全業種が好調であったが、特に、電気機械工業、一般機械工業、輸送機械工業といった機械工業が大きな増加寄与を示し、次いで鉄鋼業、化学工業といった素材型生産が大きな寄与を示したことがあげられる。

以下業種別に63年の生産をみてみることにする。

- 一般機械工業については、ショベル系掘きく機、軸受、数値制御旋盤、パルプ・製紙機械などが上昇しており、前年の伸びを大幅に上回る前年比15.0%の上昇となった。上記の品目を含めて前年比で2桁以上の上昇を示したものは、77品目中約50品目もあり、製造業の好

調な設備投資を如実に反映した結果となった。

- 電気機械工業は、前年の大きな伸びをさらに上回り同16.4%と大幅に上昇した。

モス型半導体集積回路が、これら最終需要材の好調な需要により需給がひっ迫し増産を重ねた結果、前年を上回る寄与を示したほか、好調な設備投資需要によりファクシミリ、はん用コンピュータ等の資本財が前年並みの寄与を示し、耐久消費財ではセパレート型エアコンディショナ等が大きく寄与したほか、ビデオカメラが前年に引き続き好調であった。
- 輸送機械工業は、61年から2年連続低下の後、63年は同9.0%の上昇となった。

駆動伝動・操縦装置部品など自動車部品が大幅に増加したほか、前年並に増加した普通乗用車や小型乗用車、活発な物流需要を反映した普通トラックの増加のほか、前年に大きな減少寄与を示していた鋼船が増加に転じた。
- 鉄鋼業は、前年比9.0%と大幅に上昇しており、おおむねすべての品目が増加している。

普通鋼鋼帯が前年をやや上回る寄与を示したほか、銑鉄鋳物、特殊鋼熱間圧延鋼材、普通鋼冷延広幅帯鋼、亜鉛めっき鋼板等、一般機械、電気機械、輸送機械の最終需要財の好調な需要に引っ張られたものと思われる。
- 金属製品工業は、生産財と耐久消費財の寄与が前年を上回り、同7.7%の上昇と前年の上昇幅を上回った。軽金属板製品(飲料用缶)や、ビル用アルミニウムサッシ等が前年並みの寄与を示したほか、石油ストーブ、高速道路向けの橋りょう等が増加したことによる。これらのほか、製造業設備用の機器に用いられる超硬チップなどは増加しているが、貯蔵

槽、架線金物など資本財関連が減少した。

- 窯業・土石製品工業は、同9.4%と2年連続で上昇し、ファインセラミックス(機能材)に次いで、セメントが建設財として前年にみられなかった寄与を示したほか、ガラス基礎製品、ファインセラミックス(構造物材)等の生産財が前年以上の寄与を示した。
- 化学工業は、前年比8.0%と前年並みの上昇率にとどまった。内訳をみると、ウエイトの大きな医薬品が増加したものの増加幅は前年より縮小しており、その分だけ、合成ゴムや合成樹脂、

石油化学製品などがわずかず増加幅を拡大させている。旺盛な需要を反映して好調な化学工業には、前年と特段の変化は見られなかった。

(2) 出 荷

昭和63年の鉱工業出荷は、前年比8.7%と昭和51年(同10.8%)以来の大幅な上昇となった。

(3) 在 庫

昭和63年の鉱工業在庫は、前年末比5.4%と上昇した。

表一 1 鉱工業指数の推移(全国)

(60年=100, 季節調整済)

昭和	62 年		62 年				63 年			
	62 年	63 年	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月
生産	103.2	113.0	100.4	100.4	104.0	107.6	110.6	111.5	113.7	115.8
(前期(年・年度)比)	3.4	9.5	0.9	0.0	3.6	3.5	2.8	0.8	2.0	1.8
(前年同期比)	—	—	0.6	0.5	4.3	8.2	10.8	10.3	9.2	7.9
出荷	104.4	113.5	102.1	102.0	105.4	108.1	110.8	112.0	114.3	116.5
(前期(度・年度)比)	3.9	8.7	1.1	△0.1	3.3	2.6	2.5	1.1	2.1	1.9
(前年同期比)	—	—	2.0	1.1	5.1	7.3	9.1	9.4	8.1	8.1
輸出向け出荷	101.6	105.9	102.2	99.3	102.0	103.0	103.5	102.7	108.7	108.7
(前期(年・年度)比)	0.8	4.2	2.9	△2.8	2.7	1.0	0.5	△0.8	5.8	0.0
(前年同期比)	—	—	1.9	△2.8	0.1	3.9	1.9	2.2	7.5	5.2
国内向け出荷	104.9	114.7	102.0	102.4	105.9	109.1	112.0	113.5	115.1	118.0
(前期(年・年度)比)	4.4	9.3	0.6	0.4	3.4	3.0	2.7	1.3	1.4	2.5
(前年同期比)	—	—	2.1	1.8	5.8	7.8	10.2	10.5	8.2	8.5
在庫	94.2	99.3	98.4	96.9	96.5	96.8	96.6	99.3	98.9	99.3
(前期(年・年度)末比)	△3.0	5.4	△1.2	△1.5	△0.4	0.3	△0.2	2.8	△0.4	0.4
在庫率	95.9	92.0	99.1	97.3	94.3	92.8	91.8	91.8	92.3	91.9
(前期(年・年度)比)	△5.8	△4.1	△1.2	△1.8	△3.1	△1.6	△1.1	0.0	0.5	△0.4
稼働率	95.5	101.1	94.3	93.5	95.6	98.6	100.2	99.5	101.8	102.7
(前期(年・年度)比)	0.1	5.9	1.4	△0.8	2.2	3.1	1.6	△0.7	2.3	0.9

■ 調査から

2. 本県の動向

昭和63年の本県の鉱工業指数をみると、生産は113.9で前年比7.3%上昇し、昭和58年から6年連続の伸びとなり、4年ぶりの高い伸び率を示した。出荷は115.8で前年比7.3%上昇し、本県が昭和56年に出荷指数を採用して以来連続の伸びとなっている。在庫は95.1で前年比7.9%上昇し、2年ぶりの伸びとなった。

本県の生産指数の前年比を全国値と比較すると2.2ポイント低くなっている。この主な原因としては次のようなことがあげられる。

- ① 全国で1.0%と大きな寄与度を示した輸送機械工業が、本県ではウェイトが全国の約半と低いいため、寄与度も0.1%にとどまったこと。
- ② 全国で0.8%の寄与度を示した化学工業が、本県では対前年の伸びが低いいため、寄与度も0.0%となったこと。
- ③ 全国で0.1%の寄与度を示した食料品・たばこ工業が、本県では対前年の伸びがマイナスと

なったため、寄与度も△0.6%とマイナスになったこと。

年間の指数の動きを四半期別にみると、生産は1～3月期が前期比0.1%の上昇、4～6月期が同0.7%の上昇、7～9月期が1.0%の上昇、10～12月期が1.0%の上昇と年を通して伸びを示した。出荷は1～3月期が1.1%の上昇、4～6月期が△0.8%の低下、7～9月期が1.8%の上昇、10～12月期が1.9%の上昇となっている。在庫は1～3月期が0.7%の上昇、4～6月期が1.6%の上昇、7～9月期が2.9%の上昇、10～12月期が3.5%の上昇と年を通して伸びを示した。(表-2、図-1)

前年同期比でみると、生産は1～3月期が8.8%の上昇、4～6月期が9.6%の上昇、7～9月期が6.8%の上昇、10～12月期が3.8%の上昇と61年10～12月期以来9期連続の伸びとなっている。出荷は1～3月期が11.2%の上昇、4～6月期が7.9%の上昇、7～9月期が5.8%の上昇、10～12月期が4.7%の上昇となった。在庫は1～3月期が△4.2%の低下、4～6月期が△3.6%の低下、7～

表-2 鉱工業指数の四半期推移

(60年=100, 季調済)

昭和		59年	60年	61年	62年	63年	61年				62年				63年			
		年平均	年平均	年平均	年平均	年平均	1月 3期	4月 6期	7月 9期	10月 12期	1月 3期	4月 6期	7月 9期	10月 12期	1月 3期	4月 6期	7月 9期	10月 12期
生産	季節調整済指数	98.4	100.0	102.2	106.2	113.9	100.6	101.8	101.8	104.5	103.5	102.4	106.6	112.3	112.4	113.2	114.3	115.5
	対前期増減率(%)	12.1	1.6	2.2	3.9	7.3	2.4	1.2	0.0	2.7	△1.0	△1.1	4.1	5.3	0.1	0.7	1.0	1.0
	対前年同期増減率(%)	—	—	—	—	—	1.7	1.1	△0.3	6.4	1.9	0.1	4.7	9.0	8.8	9.6	6.8	3.8
出荷	季節調整済指数	98.9	100.0	102.2	107.9	115.8	101.0	100.7	101.8	105.1	103.9	105.1	109.0	113.6	114.8	113.9	116.0	118.2
	対前期増減率(%)	9.9	1.1	2.2	5.6	7.3	2.4	△0.3	1.1	3.2	△1.2	1.2	3.7	4.2	1.1	△0.8	1.8	1.9
	対前年同期増減率(%)	—	—	—	—	—	2.3	0.0	△0.1	6.6	2.0	3.6	7.3	9.3	11.2	7.9	5.8	4.7
在庫	季節調整済指数	94.7	97.4	94.6	88.1	95.1	100.6	97.9	95.7	98.1	96.5	97.1	98.1	91.6	92.2	93.7	96.4	99.8
	対前期増減率(%)	27.8	2.9	△2.9	△6.9	7.9	△0.6	△2.7	△2.3	2.5	△1.6	0.6	1.0	△6.6	0.7	1.6	2.9	3.5
	対前年同期増減率(%)	—	—	—	—	—	1.8	△3.8	△5.6	△2.9	△4.8	0.0	3.4	△6.9	△4.2	△3.6	△2.0	7.9

(注) 対前年同期増減率は原指数による。

9月期が△2.0%の低下、10～12月期が7.9%の上昇となった。(表-2, 図-1)

生産指数の前年比を業種別にみると、昭和63年は主要15業種のうち食料品・たばこ工業、繊維工業の2業種で低下、それ以外の13業種で上昇した。上昇率が大きな業種は、金属製品工業(対前年比13.2%)、電気機械工業(同12.4%)、精密機械工業(同11.5%)などであった。

また財別に前年比をみると、資本財で16.8%の

上昇、鉱工業用生産財で10.0%の上昇と大幅な伸びとなった。これに対し非耐久消費財で△6.5%の低下、耐久消費財が△1.6%の低下と消費財はすべて低下となった。

3. 業種別の概況

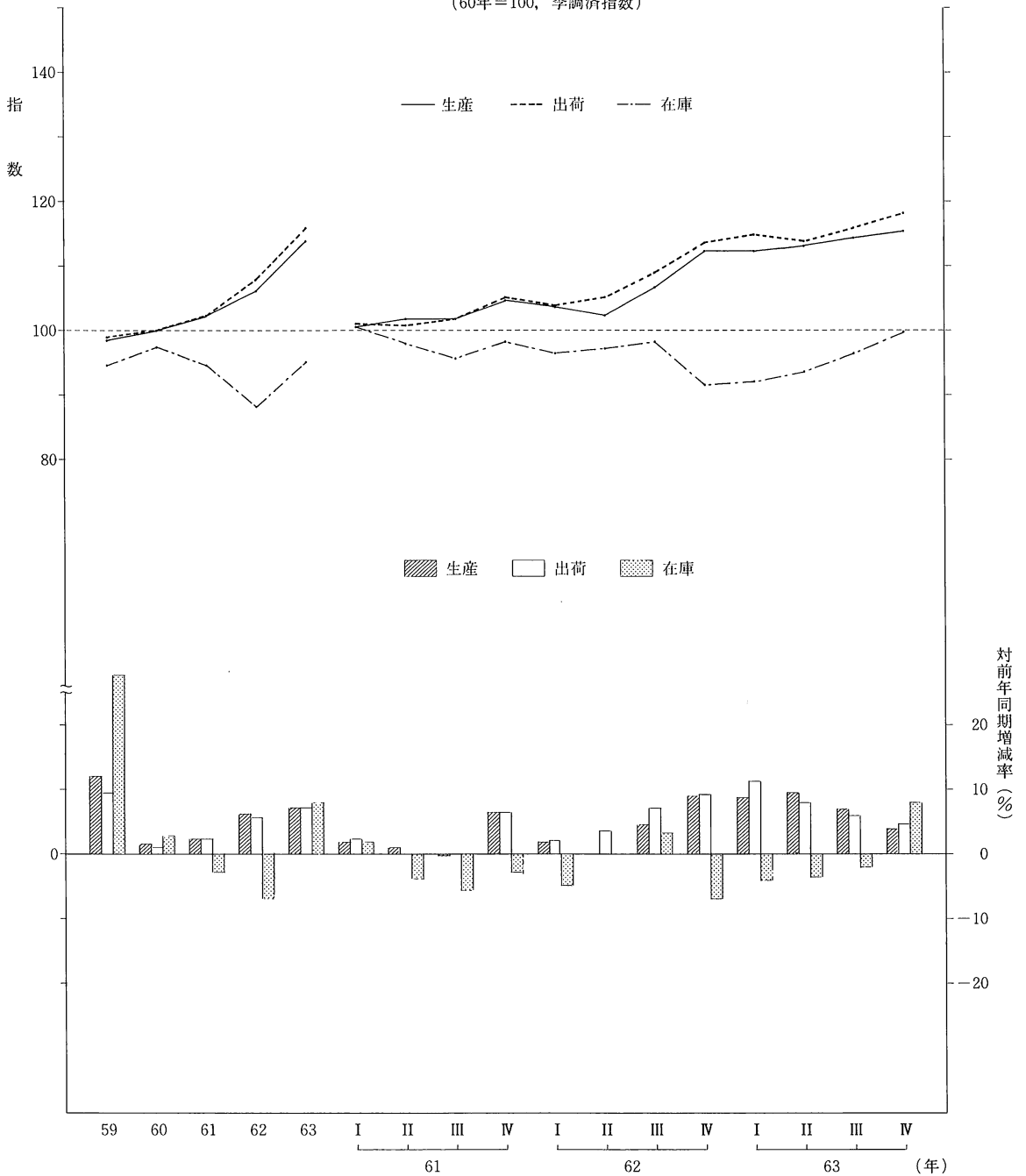
昭和63年の鉄鋼業の生産指数は112.9で前年比9.2%上昇し5年連続の伸びとなった。これは、その他の金属めっき鋼板、特殊鋼熱間鋼管、普通

表-3 業種別生産指数対前年(前年同期)増減率

(増減率：季調済指数，単位：%)

業 種	62 年	63 年	期 別			
			1～3 月 期	4～6 月 期	7～9 月 期	10～12 月 期
鉱 工 業	3.9	7.3	8.8	9.6	6.8	3.8
製 造 工 業	3.9	7.3	8.8	9.7	6.9	3.8
鉄 鋼 業	2.7	9.2	12.8	7.5	8.0	8.6
非鉄金属工業	13.0	2.2	12.1	7.9	△ 3.5	△ 6.1
金属製品工業	5.9	13.2	16.1	8.9	20.2	8.7
機 械 工 業	△ 0.7	11.7	11.8	17.7	9.6	8.2
一般機械工業	△ 0.5	11.0	9.1	19.6	11.4	4.8
電気機械工業	0.7	12.4	15.8	17.5	9.5	8.4
輸送機械工業	△12.8	8.1	3.4	△ 4.8	12.8	21.8
精密機械工業	△ 5.7	11.5	0.0	26.5	△11.5	27.9
窯業・土石製品工業	10.4	3.6	7.0	5.8	4.1	△ 1.7
化学工業	21.2	0.2	10.2	2.4	8.3	△14.3
石油・石炭製品工業	1.5	6.1	7.7	0.8	4.9	10.5
プラスチック製品工業	3.8	8.4	10.5	7.4	6.8	9.0
パルプ・紙・紙加工品工業	8.7	10.2	10.5	11.2	9.5	9.7
織 維 工 業	0.1	△ 3.4	△ 9.4	△ 2.5	0.5	△ 1.8
食料品・たばこ工業	3.0	△ 6.8	△10.4	△ 6.3	△ 9.1	△ 0.6
そ の 他 工 業	1.8	13.6	7.6	10.1	19.4	17.6
ゴム製品工業	△ 3.8	23.0	△13.0	15.0	43.6	48.5
皮革製品工業	2.0	2.4	1.6	△ 5.2	6.8	6.6
家具工業	10.4	49.9	59.9	53.9	43.8	41.6
木材・木製品工業	5.5	△ 0.2	11.0	△ 2.9	△ 1.0	△ 6.4
その他製品工業	△ 1.0	1.8	2.0	△ 1.6	4.8	1.9
鉱 業	△ 6.6	6.1	5.1	0.7	5.1	12.7

図一 1 鉱工業指数の四半期推移
(60年=100, 季調済指数)



(注) 対前年増減率の棒グラフは原指数による。

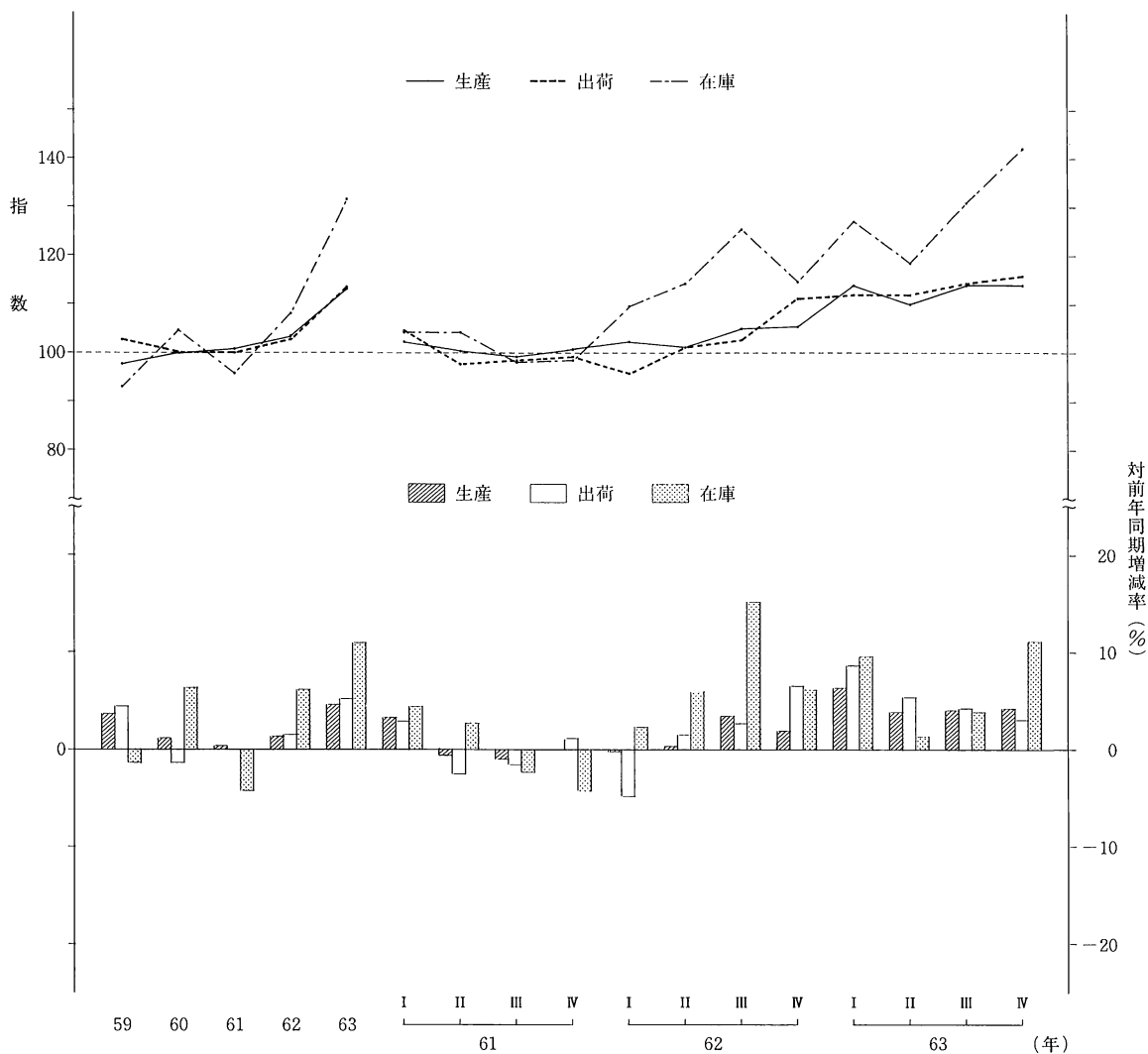
めっき鋼管等が減少したものの、銑鉄鋳物、鋳鋼品、H型鋼等が増加したことによる。出荷指数は113.4で前年比10.3%の上昇、在庫指数は131.6で同22.1%の上昇となった。

生産指数の年間の動きを前期比でみると、1～3月期は3.5%の上昇、5～6月は△3.5%の低下、

7～9月期は3.5%の上昇、10～12月期は0.3%の上昇となった。前年同期比でみると昭和62年4～7月期以来7期連続の上昇となった。

(注) 指数の折れ線グラフは季節調整済指数により作図されている。また前年同期比の棒グラフは原指数により作図されている。

図一 業種別の概況
図一(一) 鉄鋼業



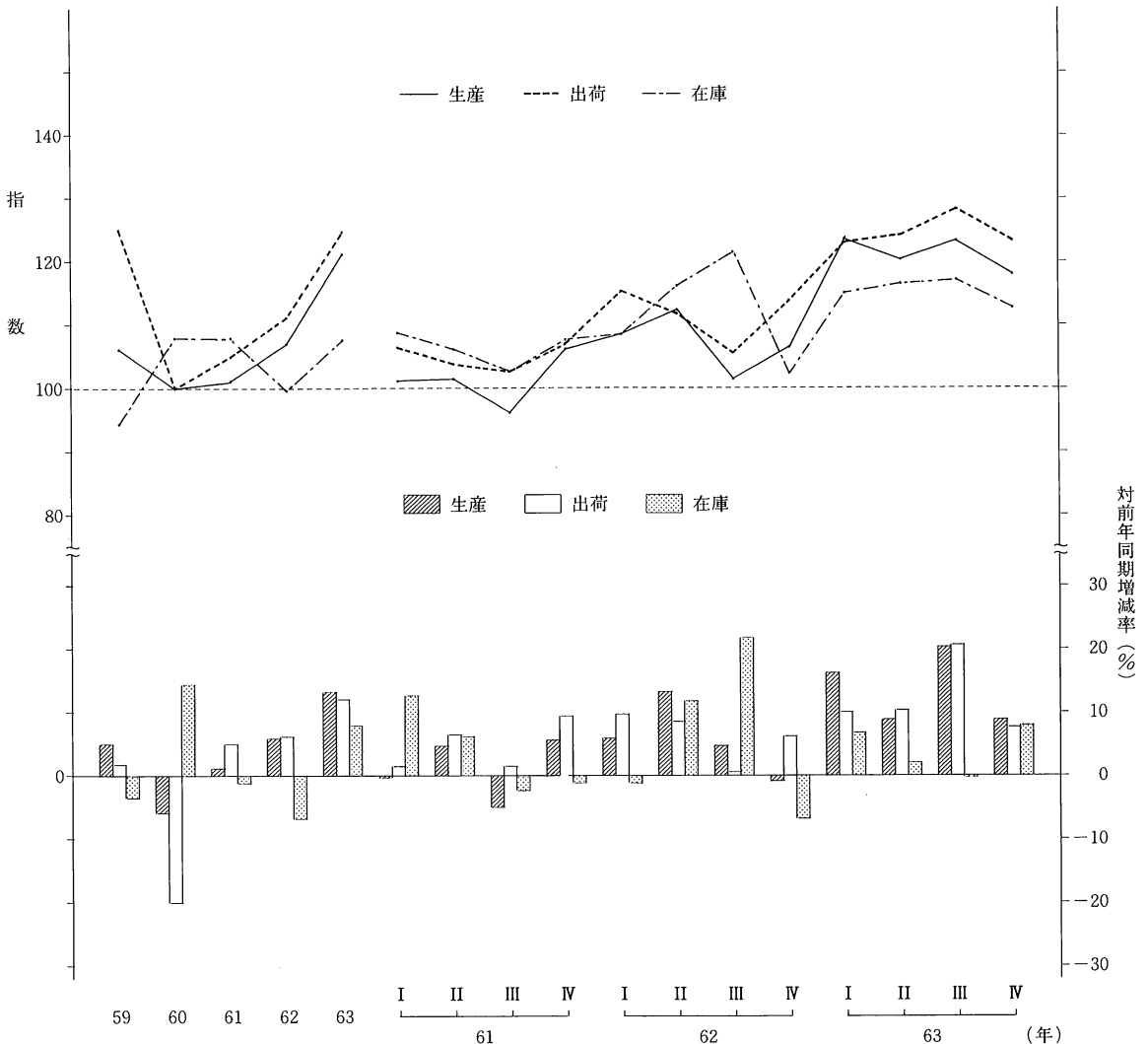
■ 調査から

昭和63年の金属製品工業の生産指数は121.3で前年比13.2%上昇し3年連続の伸びとなった。これは、その他のアルミ製建具、架線・金物、金網等が減少したものの、食缶、飲料用缶、かさね板ばね等が増加したことによる。出荷指数は124.7で前年比12.0%の上昇、在庫指数は107.5で同7.9

%の上昇となった。

生産指数の年間の動きを前期比で見ると1～3月期は16.1%の上昇、4～6月期は△2.6%の低下、7～9月期は2.2%の上昇、10～12月期は△4.3%の低下となった。前年同期比で見ると年を通して上昇した。

図一2—(2) 金属製品工業

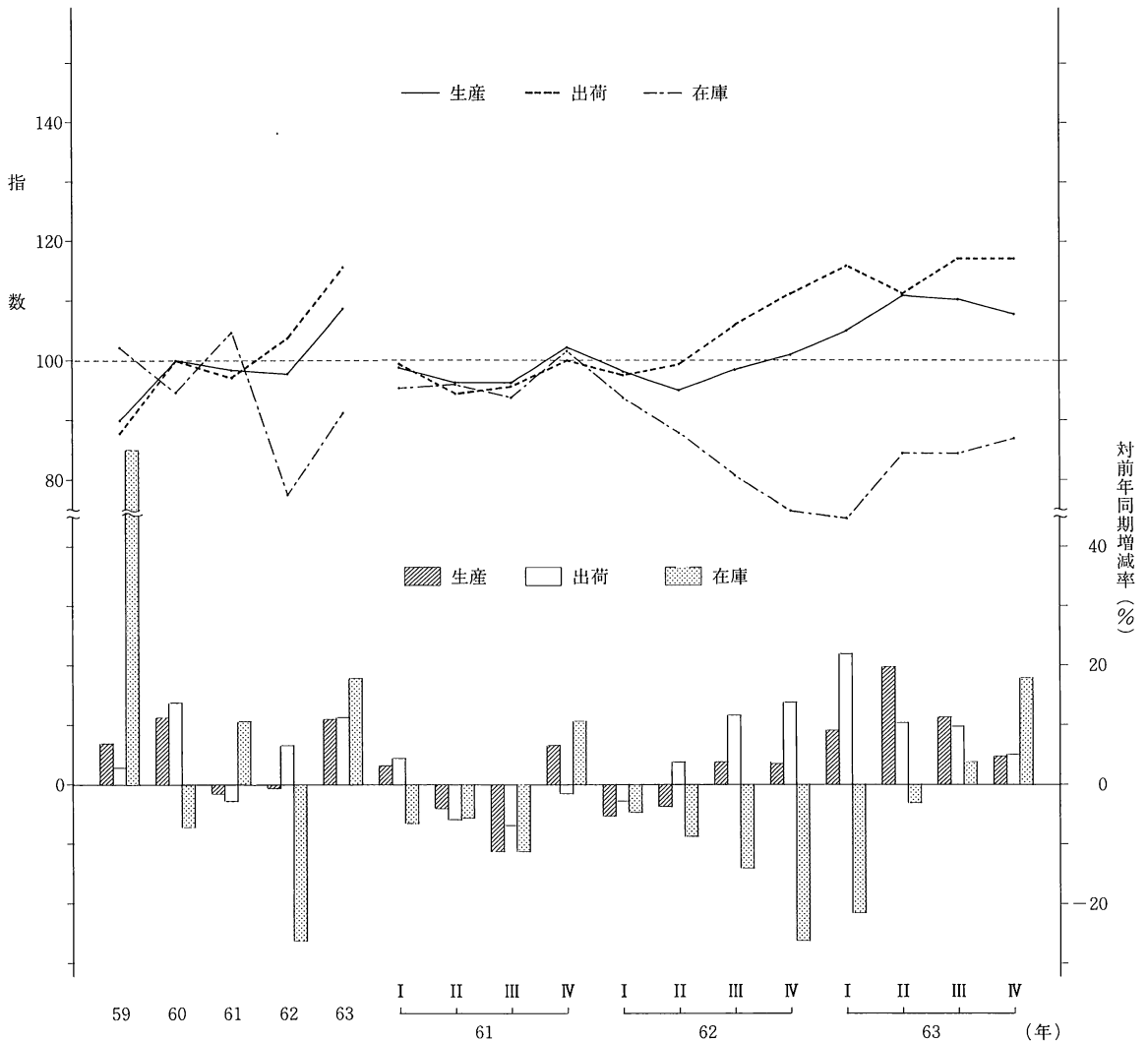


昭和63年の一般機械工業の生産指数は108.6で前年比11.0%の上昇となった。これは、電卓、タービン、ゴム用金型等が大幅に減少したものの、騰写機、油圧シリンダー、電気ホイス等が増加したことによる。出荷指数は115.5で前年比11.4%の上昇、在庫指数は91.1で同17.7%の上昇、在庫

指数は91.1で同17.7%の上昇となった。

生産指数の年間の動きを前期比でみると、1～3月期は4.1%の上昇、4～6月期は5.6%の上昇、7～9月期は△0.6%の低下、10～12月期は△2.1%の低下となった。前年同期比では年を通して上昇した。

図—2—(3) 一般機械工業



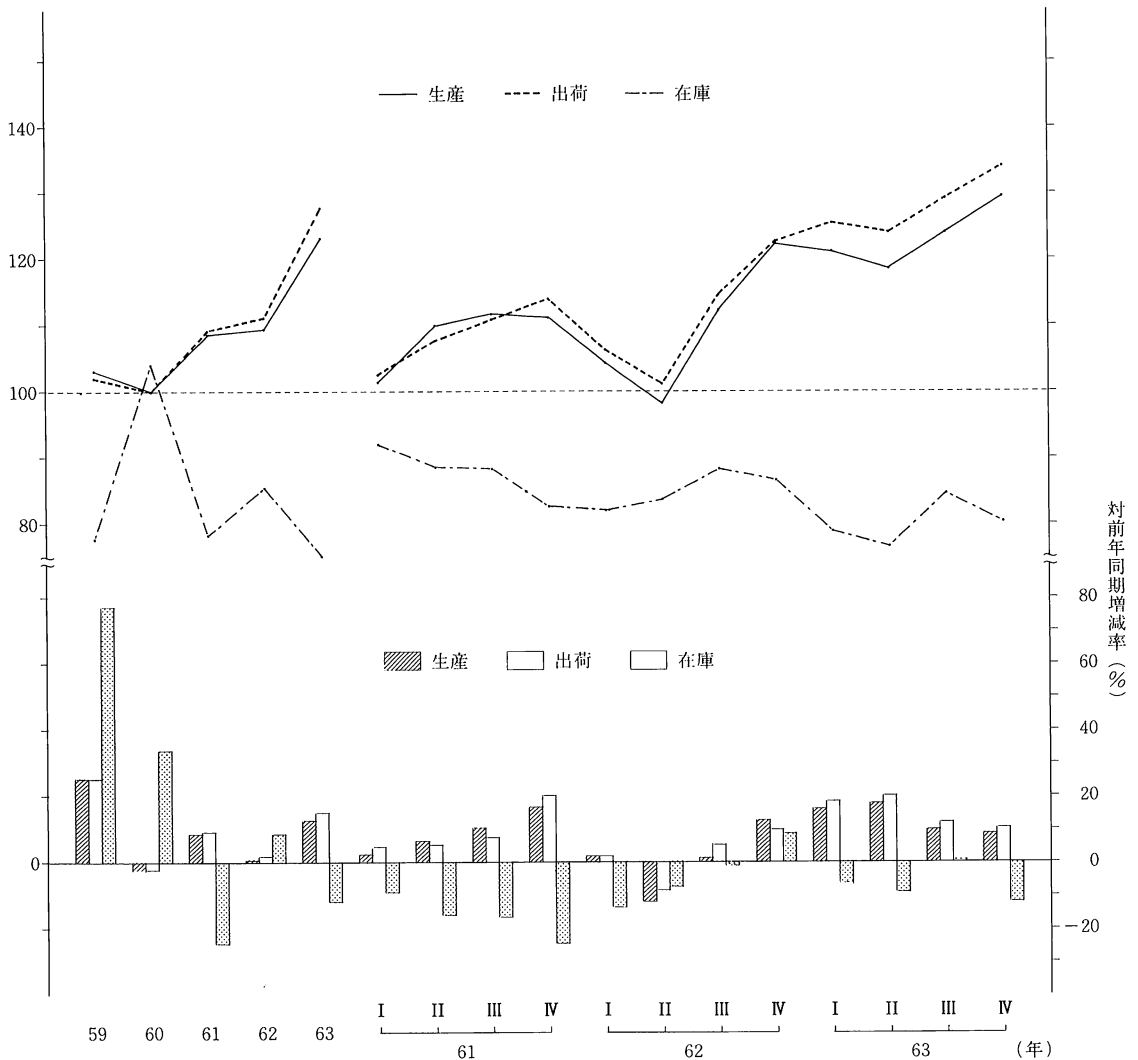
■ 調査から

昭和63年の電気機械工業の生産指数は123.0で前年比12.4%上昇し3年連続の伸びとなった。これは、カーラジオ、交流発電機、高圧遮断器等が減少したものの、パーソナルコンピューター、直流機、ステレオセット等が大幅に増加したことによる。出荷指数は127.7で前年比14.9%の上昇、在庫

指数は75.1で同△12.0%の低下となった。

生産指数の年間の動きを前期比で見ると、1～3月期は△1.1%の低下、4～6月期は△2.1%の低下、7～9月期は4.5%の上昇、10～12月期は4.4%の上昇となった。前年同期比では昭和62年7～9月期以来上昇している。

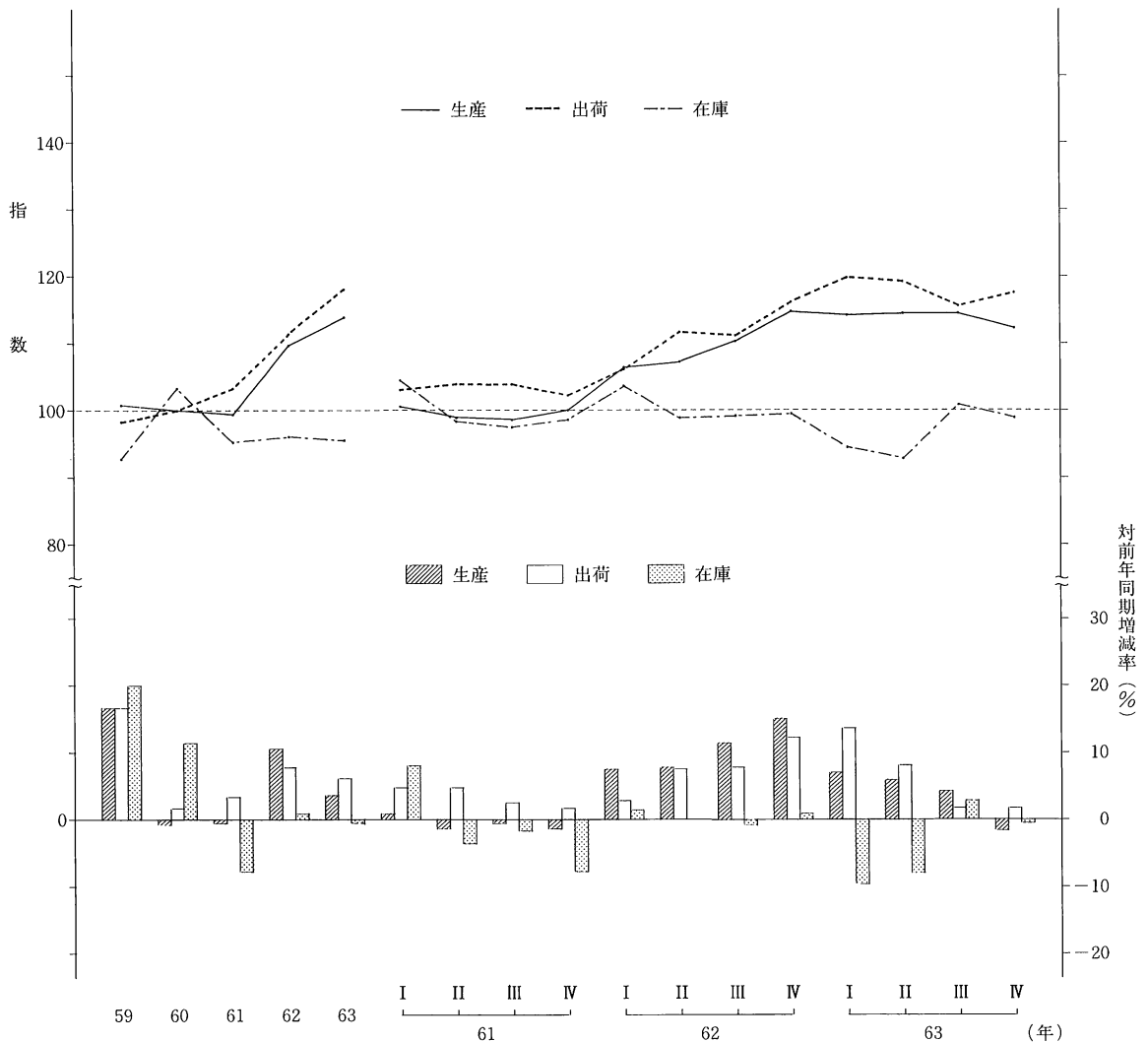
図一2—(4) 電気機械工業



昭和63年の窯業・土石製品工業の生産指数は、113.8で前年比3.6%の上昇となった。これは、護岸用コンクリートブロック、ブラシ、ガラス基礎製品等が減少したものの、ファインセラミックス(耐摩耗)、ガラス製台所・食卓用品、生石灰等が増加したことによる。出荷指数は118.0で前年比6.0%の上

昇、在庫指数は95.6で同△9.5%の低下となった。生産指数の年間の動きを前期比でみると、1～3月期は△0.5%の低下、4～6月期は0.1%の上昇、7～9月期は0.1%の上昇、10～12月期は△1.8%の低下となった。前年同期比では、10～12月期に7期ぶりに低下した。

図一2—(5) 窯業・土石製品工業



昭和63年の食料品・たばこ工業の生産指数は99.4で前年比△6.8%低下し、4年ぶりの下げとなった。

これは、バター、植物油脂、焼酎等が増加したものの、たばこ、乳飲料、小麦粉等が減少したことによる。出荷指数は95.6と前年比△10.6%の低

下、在庫指数は57.5で同0.9%の上昇となった。

生産指数の年間の動きを前期比でみると、1～3月期は△2.3%の低下、4～6月期は△0.5%の低下、7～9月期は△3.5%の低下、10～12月期は5.1%の低下となった。前年同期比でみると、昭和62年7～9月期より連続6期低下している。

(統計課・企画分析グループ)

図一2—(6) 食料品・たばこ工業

